

# 済州道の口承説話に関する予備的考察

鈴木 寛之

## 1. はじめに

筆者は、今回の日韓共同調査では「口碑文学」担当という形で、済州道内三箇所（南済州郡安徳面徳修里、北済州郡牛島面、北済州郡涯月邑納邑里）の口承説話について聞き取り調査を行なった。いずれも通訳を介しての聞き取りであり、本稿で紹介している「話例」はいずれも個々の話の梗概となっている点を先に記しておく。

## 2. 徳修里のトツチェビ

1998年度の南済州郡安徳面徳修里での調査では、地域に伝わる伝説として「広静堂と馬の墓」「山房山の話」「山房窟寺の薬水」「龍の頭」「子守唄の丘」などに関する話例の資料を得ることができた。徳修里の口承説話として特に興味を覚えたものは、家ごとに祀られる守護神がトツチェビとも称されている点であった。

韓国の代表的な「妖怪」として知られるトッケビは、済州島ではトツチェビと呼ばれている。金宗大『韓国のトッケビ研究』によれば、一般に韓国説話のなかのトッケビは、剽軽な性質で、いたづらを好み、人の及ばない非常な能力をもつ超自然的存在として描かれることが多い。また、韓国の「半島」部においては、トッケビが豊漁祈願・疾病退治の機能神として祀られる例も多いとある。

徳修里のトツチェビは、吉事も凶事も司る神秘的な存在で、時には人を死に至らしめることもある。特に女性に対していたづらを働くことが多いともいう。また正体不明の火は一般にトツチェビの仕業とされる。一説には、生きているトツチェビが人型で出現し、死んだトツチェビが火だけを見せるのだともいう。またトツチェビは箒にやどるとされ、古い箒を棄てる時には出来るだけ家の遠くに棄てるものとされる。

徳修里は済州島内で、もともと鍛冶業の集落として知られていた。その鍛冶業の職能神

が、近隣の地域からトッチェビという名で呼ばれていたのである。本稿では、この徳修里におけるトッチェビについて報告を行ないたい。

かつて徳修里では、餅などを蒸すシル（甌）の上に石を載せたものを神体とする、家の神を祀っていた。これは台所の隅や屋敷地の後方の角などに祀られていたものだが、多くは1948年の四・三事件後に姿を消したといわれる（一説には1960年代頃、宋氏の「門中会議」によって祭祀の中止が決議されたともいう）。

この神は、トゥイタルバン（後ろのお爺さん）と呼ばれるが、別称として、徳修里で鍛冶業を始めた宋氏に因んでソンヨンガム（宋令監）、またヨンガムシン（令監神）の名もある。鍛冶業をしていた家、また、宋氏の家では必ず祀っていたという。また以下の話例に示すように、ソントッチェビ（宋トッチェビ）という呼び名もあった。

かつて近隣の地域から、徳修里は「トッチェビを祀る村」だと認識されており、徳修里の女性が結婚して他所へ嫁ぐと、その家のトッチェビもその女性と一緒に付いて行くのだと言われ、徳修里の女性とはあまり結婚したくない、と噂されたこともあったという。以下は、現在徳修里に住んでおられる方々からの聞き取り内容である。

[話例1]

トッチェビ神は、昔、家の裏に置いて祀ったもの。年に一度餅や酒を供える祭祀をしたが、詳細は記憶していない。徳修里は鍛冶の村で大型の窯があったので、電気のない昔は、夜にふいごの火がつくと、それが近隣の村々からも点々と大きく見えた。それが何日も続くのが常だったので、近隣の人々は、「徳修里のあの火は、人間がつくった火ではない。トッチェビの仕業だ。トッチェビ・プル（火）だ」と噂したものである。この辺りでは、正体不明の怪光をトッチェビの仕業と考えるのが一般的である。

(1931年生、男性)

[話例2]

自分の家にはなかったが、徳修里にはトゥイタルバンを祀る家は多かった。特に鍛冶の神というわけではなく家の神である。旧暦の毎月5日や、先祖の法事の際などに、酒と食物をシルの穴に注いで供えた。自分には9人の子供がいる。最近、末娘が嫁いで行ったが、結婚前、新郎の母親が「この家にはトッチェビがいるのではないか？」と様子を見に来たことがあった。癩に触ったので、「うちには十のトチェビがいたのだが、まだ二つ残っている。一つ2,000万ウォンで買ってくれないか」とうそぶいてやった。

35年ほど前、徳修里でトゥイタルバンを祀っていたある人が、祭祀を続けるのを好まず

にシルを潰したところ、間もなく彼の次男が急死したことがあった。

自分自身、内心では、この家にもトッチェビがいるのではないか、と思ってもいるが、言わない。トッチェビについて口にするのは一種のタブーだと考えている。

(1922年生、男性)

[話例3]

トゥイタルバンは、ソントッチェビとも呼んだ。自分が30代の頃には、台所の隅にシルを祀っていたが、そのシルを崩して、もう30年ぐらいになる。家の守護神みたいなもので、吉事も凶事もこの神のお陰だと言われていたが、今では信じていない。「徳修里の女性にトッチェビが付いていく」というのも、迷信にすぎない。

トッチェビ・プル(怪火)の話は、父からも聞いたし、実際自分も山房山の周囲で見たことがある。これは気が弱い人がよく見るもので、見ると病気になると言われた。

(1926年生、女性)

[話例4]

家で祀る神のことを、家内ではヨンガム、チルソンなどと呼んだ。シルの上に藁を帽子のように被せたものを神体としていた。家に起こる吉事も凶事もこのチルソンのおかげだと言われた。今でも、何軒かは祀っている家もあると思うが、見せて欲しいと頼んでも、容易には見せてくれないだろう。20年程前、酒に酔って自家のシルに火を点けた人がいたが、ひと月後に亡くなってしまった事があった。

トッチェビ・プルは気の弱い人が見ると、魅入られてその後を付いて行ってしまう。この火は火薬の匂いを嫌うと聞く。

(1925年生、男性)

トッチェビ神にまつわる婚姻忌避に関して、『韓国の民俗大系』第5巻87頁には以下のような記述がある。

「昔は、兎山鬼神(蛇神)が娘から娘へと受け継がれるのだといって、結婚相手としては嫌われた。ところが、今ではトチェビ鬼神をもっと恐れている。手厚く祀れば繁盛するけれども、そうでないと滅亡したり、恐ろしいことが起こる。少しでも良いことがあれば、トチェビ鬼神を祀ったからだといわれるけれども、結婚相手もトチェビを祀る家系は敬遠される。トチェビ鬼神、クスル婆さんなど、それぞれの家によって大切に祀っている鬼神がある。これは、その家で行われる祭りの時に見ればわかる。また、部落内ではたがいに

よく知っていることである。

トチェビはプルミ鬼神すなわちふいごの神で鍛冶屋神だという人もいるけれども、プルムを最初に使った人はカルメ婆さんとカルメ爺さんである。そこで、自動車屋、精米所、プルミカン（鍛冶屋）は同じく、カルメ婆さんとカルメ爺さんを祀っている（話者：旧左面細花里、男巫）。」

以上みてきたように、濟州道における口承説話のうえでは、トツチェビは「家の盛衰」を司る超自然的存在と観念されている一面がある。濟州道内において、こうした「家の盛衰」観念をどのような形で他の説話一般のなかから読み取れるのか、今後の課題として追究してゆきたい。

### 3. 牛島の口承説話

北濟州郡牛島面の口承説話を収載した文献として、管見の範囲では以下の三点が量的にまとまったものであり、いずれも比較的近年の刊行のものである。

まずは、1987年に刊行された『演坪郷土誌』が挙げられる。この本には「遺跡と伝説」の項目に〈遺跡〉2話、〈地形、地名に関する伝説〉14話、〈村落の名称について〉8話、それに加えて〈説話〉が掲載されている。この〈説話〉の項には「牛島と演坪という名称の由来」「島の開拓者・金進士」「釜山の長」「鮑のお婆さん」などがある。

第二に、1990年刊行の『濟州島部落誌(Ⅲ)』の「説話」の項目立てをみると、「牛島の島名由来」「人物に関する伝説」「部落名に関する伝説」「地形・地名に関する伝説」「飲料水に関する話」となっている。

第三に、1996年に刊行された大冊の『牛島誌』においては「第8篇：口頭伝承」の項が設けられており、この項は第一章「口碑伝承」、第二章「地名由来」から構成されている。この第一章はさらに細かく「伝説」「民謡」「俗談」「俗信談」に分類されている。

以上の三文献の項目立てをみると、牛島における口承説話の主要なものは「伝説」、それも主として島内の地名由来に関するものであり、それに加えて、島の開発に功績を残した先人の話、離島の生活における飲料水の確保に関する話、用水や溜め池の話が多い。

以下、1999年度の牛島での現地調査で得た話例を紹介する。

#### [話例1] 倭人墓

海岸を見下ろす丘上にある。昔（「植民地時代」以前）、海から日本人の遺体があがったのを牛島の人たちが合葬した墓所だと伝えられている。「昔、牛島に攻め入って死んだ日本

人の死体を埋めた墓」と説く人もあれば、「日本の商船が難破してその遺体を埋めた場所」とする人もあり、伝承の内容は一定しない。

#### 〔話例2〕トツチェビ

島内にトツチェビが出現する場所は多々ある。「トツチェビの丘」という場所の近くを豚肉を持って歩くと、トツチェビが付いてくる。大きな人の姿、または女性、子供の場合もあり形状は不定。トツチェビにたぶらかされて夜間に山中をさまよひ、死体となって発見された人もある。

曇りや雨の日に見える原因不明の怪火もトツチェビの仕業である。古木などで青い光を放つ。埋葬した人骨から出る燐光が正体とも言われる。二人で歩いている、気が弱い人だけに見える、また病気の人にも見えるという。風で多くの漂着死体が打ち上げられた海岸ではトツチェビの火がよく見られる。

(1934年生、男性)

#### 〔話例3〕下牛目洞の孫さんの話

下牛目洞に住んでいた穀物商の孫さんが、米を仕入れに全羅南道の康津に出掛けた。その土地で知り合った女性の父親が孫さんを気に入って、牛島に、娘と一緒に連れて戻って欲しい、そうしたら帆船に一杯の米をあげようと約束をした。娘は一緒に行くことになったが、乗船の際、まず孫さんが先に船に乗って、次に娘が乗ろうとしたら、船内に渡る足掛かりの板を孫さんが取り外してしまった。娘は悲しみのあまり海に身を投げた。やがて孫さんの乗った船は無事に牛島まで帰着したが、みると船と一緒に娘の遺体も着いて来ていた。孫さんは、驚いて密かに遺体を引き上げて埋め、法事も行なったが、後に家運も傾いてしまい、子孫は今は牛島には残っていない。

(1927年生、男性)

## 4. 納邑里のヤン・サンウ氏の語り

2000年度の北済州郡涯月邑納邑里調査では、話者をヤン・サンウ氏（1922年生、男性）一名に絞って口承説話の聞き取り調査を行なった。氏は、同じく納邑出身の奥さんと二人暮らし、子供は7人いる。「学校には行っていない」のだが、近所の人たちからも「記憶力がいい」と評判が高く、「正式に教育を受けたら文章家になれる」と言われている程である。

氏の話の語り方にはいくつかの特徴がある。話を語り出す前には、必ず煙草を一服して間をもたせたり、物語のクライマックス部分でわざと話を止め、再度間をおき、煙草を一服して聞き手の気をもたせるのである。

氏の伝承する話の多くは、風水にまつわる話や、儒教思想を説く教訓的な話が多いが、総じてその語り口調がきめ細かく、語りの途中で休憩をはさんで、約1時間程に渡る話もあった。

今回の調査では、のべ4日間で、約20話の資料を得た。以下に内容を例示してみる。

#### 〔話例1〕 どちらの子供か

子供がいないことだけが悩みの、ある財産家があった。その隣家には子供がたくさんいた。財産家は隣家の主人に、自分の妻に子種を分けてくれと頼み、妻にも言い含めて、一夜、二人を一緒に過ごさせた。間もなく妻は妊娠、男の子が産まれた。夫は最初は喜んだが、本当の自分の子供ではないので、複雑な思いだった。それでも、近隣もうらやむような立派な息子に育てた。それをみて隣家に住んでいる、息子の「本当の父親」は欲が出て、「息子を自分のもとに戻してくれ」と申し出たため、財産家は、悩んで病気になってしまった。息子はこの時、母親から自身の出生の経緯について初めて知らされた。隣家の主人は、自分の頼みがなかなか聞き入れてもらえないので、官家に告訴に出た。官家では事情を聞くために息子呼び出した。約束の日、息子はわざと定刻に遅れてやって来た。そして、遅刻の理由を問われた際に、以下のように答えた。「自分がここまで歩いて来る途中に喧嘩があって、その様子を見ていて遅刻をしてしまいました。ある人が作物の種を畑にたくさん蒔いたのですが、そのうちのひと粒が隣の畑に落ちてしまい、生長した作物がどちらの所有になるかで争っていたのです。」その話を聞いた官家長が「それは実際に育てた人のものだろう」と言うと、「自分もその作物と一緒に、私を今まで育ててくれた現在の両親の息子です」と述べた。

#### 〔話例2〕 米人は韓国人の外孫

昔、国が豊かだった頃、国内に盗賊がはびこったことがあった。国王が、盗賊を捕まえた者には自分の娘を嫁にやる、と告知したが、なかなか捕まえられる者がいなかった。ところがある日、一匹の犬が盗賊の首をくわえてやって来た。獰猛な犬で、恐くて誰も側に近付けず、餌を与えれば帰るかと思ったが、それもない。仕方なく、王が娘に事情を話すと「国のために、私はこの犬に嫁ぎます」と答え、共に出ていった。何年かの後、この娘が「犬でも人間でもないような、妙な人間たち」と一緒にやって来た。そのころは米人と

という言葉がなくて、西人と呼んだ。西人は犬の子孫なので髪が黄色で目も青色である。

〔話例3〕実在した「名医」の話

実在した名医の話。昔ある女性が、退屈で茄子で遊んでいたら、女性器から取れなくなってしまい、困ってこの名医の所にやって来た。医者は、この女性が家の玄関の前にやって来た姿を見ただけで、なぜ来訪したのかがすぐに判り、家の中から「そこにある大きな岩を抱えてこちらへ運びなさい」と命じた。女性が大きな岩を抱えるため足をふんばって力んだ途端、茄子はぶじ外に落ちて出て来た。

これらの話は、氏が幼少の頃に、祭祀の夜、深夜 12 時を過ぎて眠くなった時に、当時 70 才ぐらいだった祖父から眠気ざましに聞いたものが多いという。話上手だった祖父が語ってくれた内容を、氏は記憶力がよいので「一度聞いただけで忘れない」でいるのだという。ただ、今回の聞き取り調査までにこうした話を外部者に語る機会は「ほとんどなかった」とのこと。氏の表現を借りれば、幼少の頃に聞き覚えた話だが、「今までイヤギ・ポツタリ（話し袋）を使ったことは一度もなかった。自分が死んで、そのまま一緒に持っていけると思っていた」ということになる。

以下に、話が一段落する箇所や、物語のヤマ場で休憩する時に氏がよく用いる口癖を挙げてみる。

- ・「(調査者が顔を見せると) もう来ないで」
- ・「話の辻褄が合わないと、文章にならないよ」
- ・「(話の間をもたせて) 全部話してしまうと面白くないのになあ……」
- ・「(同上) イヤギ・ポツタリ (話し袋) は、全部開けてしまうと面白くないのになあ……」
- ・「(調査者が話の続きを早く聞いたような様子を見せると) 疲れるじゃないですか。さっさと話してしまったらおもしろくないよ」
- ・「(話を途中で止め、煙草を一服しながら) 話の充電をするのは、結構時間がかかるよ」
- ・「話は、長いのも短いのもあるのが、面白さ」
- ・「(独り言のように) [自分は] 教育不足なんだけど、話はよく話せるよなあ」
- ・「(話の登場人物が寝るとき) ……〇〇が寝た。私もちょっと休もう (と言って煙草を一服する)」

- ・「ちょっと休んでから話した方が、もっと面白いよ」
- ・「私の話す内容って、もっともでしょう？」

## 5. おわりに

今回の調査報告では、3年度にわたる聞き取り調査内容の概略のみを記した。これらの資料をもとに済州道口承説話の現状についての追究を今後の課題としたい。また、納邑里のヤン・サンウ氏の語りからは、口承説話を伝承する際の場の問題についても、さらに調査を継続したいと考える次第である。

### 参考・引用文献

- 牛島誌編輯委員会編 1996 『牛島誌』 牛島誌編纂委員会（韓国語）
- 金 宗大 1994 『韓国のトッケビ研究』 国学資料院（韓国語）
- 玄容駿 著・朴健市 訳 1978 『＜アジアの民話 2＞ 済州島の民話』  
大日本絵画巧芸美術
- 済州大学校耽羅文化研究所編 1990 『＜耽羅文化叢書＞済州島部落誌（Ⅲ）』  
済州大学校耽羅文化研究所（韓国語）
- 竹田且・任東権 訳 1992 『韓国の民俗大系 一韓国民俗総合調査報告書一』 5  
＜済州道篇＞ 国書刊行会（原本：韓国文化公報部文化財管理局発行）
- パク・キョンシク編 1987 『演坪郷土誌』 演坪国民学校（韓国語）

### 付 記

済州道での聞き取り調査においては、左恵景先生（済州大学校博物館特別研究員，同大学校非常勤講師）、また通訳として済州大学校の梁宰赫さん、玄宥才さんに大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

# 環東中国海における 二つの周辺文化に関する研究

— 沖縄と済州の「間地方」人類学の試み —

平成 10～12 年度科学研究費補助金  
基盤研究 (A) (2) 研究成果報告書  
課題番号 10044011

平成 13 年 3 月

研究代表者 津波 高志

(琉球大学法文学部教授)